

その嶺上牌、取る必要なし！（一発ネタ）

kinmokusee

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

咲が原因で嶺上ヤクザとなった高校生が宮永咲に憑依したのは良いけど、何故か嶺上開花出来なかった

目次

リンシャンリストは挫けない	1
カンせずにはいられないな……!	8
普通のリンシャンさせてーな	17

リンシャンリストは挫けない

「咲—s a k i—」という漫画を知っているだろうか。

これは従来、地味で荒々しく煙草臭いのが常であった麻雀漫画に革命をもたらした作品で、その登場人物の多くが可愛い女子高生であり、賭博ではなくスポーツとして熱く闘牌する姿を描いたものである。

また他にも特徴なフアクターとして、トップレベルの女子高校生雀士となると何らかの特殊能力を持っていたりして、一部では超能力麻雀と呼ばれていたりもする。事実、作中で出てくる卓の全てがリアル麻雀からすれば低確率な役や役満がでまくる魔物卓だ。

そしてその主人公である宮永咲は普段は大人しい文学少女なのだが、麻雀をやると一変、たちまち笑顔で対戦相手の女子高生を粉碎・玉砕・大喝采する大魔王へと変貌する。

そんな彼女の得意役は嶺上開花——これは成立率が0.28%と一般的には言われる役であるが主人公の場合はそれはもうじゃんじゃん和了する。まるで喰いタンで和了するようにボンボンバンバンと和了する。これが主人公が魔王と呼ばれる所以だったりするが、まあそれは置いといて。

俺が咲と言う漫画に出会ったのは高校生の時だった。初めは原作表紙に描かれた、原村和というピンク髪のお餅大目超絶美少女に目を引かれて読み始めたのだが、読んでいくうちに麻雀そのものに引かれ始め、最終的には主人公の嶺上開花に憧憬を抱くようになった。

そうして友達がない俺がネット麻雀を始めるのは最早必然の理だったのだろう。そのネット麻では勝つことが目的ではなく、ただただ赤子のような純粋な想いで嶺上開花を目指して毎日毎日カンを続けた。

手牌が良くてもカン、悪くてもカン、聴牌を崩してもカン、親リーが入ってもカン、相手が役満手だというのが分かっててもカン……、そ

う、いつ何時だつて俺の頭の片隅には四枚の同じ牌から生まれるデステイニードローを夢想され、感謝の嶺上開花一日一万回は一度も欠かさなかった（しかし努力は虚しく達成されることはなかったが）。

そんなことを続けていたからか、当然俺のアカウントはネット麻雀の掲示板に晒されたりもした。害悪扱いもされた。アカウント凍結まではいかなかったが、対戦相手が俺だとわかるとすぐに回線を切る奴まで現れたくらいだ。

それでも俺はめげずに嶺上開花の担い手となるために勇往邁進し続けた。半年くらいするとそれは少数ながらグループとなり、さらに半年すると会員数200人にも膨らんだ一団となり俺はその会長に就任した。俺はその団を「リンシャンリストの集い」と適当に名付け、その同志たちと共に更なる嶺上の高みを駆け上って行った。

しかし良く言われて困ったのは、確かに俺たちは宇宙の遍く真理にただ一辺と煌めく嶺上を自由自在に操ることが目的としているが、だからといって麻雀という崇高なる嶺上咲く土壌を蔑ろにしている訳ではない、ということである。

土壌に花を咲かせるためには酸素、水、日光の三条件が必要不可欠であるように、嶺上開花を極めるためには麻雀の基礎的なルール、牌の扱い、そして牌効率を体系的に学ばなくてはならないからだ。特に基本が終わった者に対しては常に牌効率を意識し、学ぶように言いつけた。これは嶺上開花の為でもあるし、何より忘れてはならないのは俺が咲で好きなキャラクターは変わらず原村和で彼女がデジタル打ちのスペシャリストだからだ。∴それはまあいい。

兎にも角にも俺はそうして生涯嶺上街道を進み続ける。∴はずだった。

だが気付いたら何だか良くわからないが、死んでいたらしい。

その場で偉そうに座っていた自分の事を神様と呼ぶ恐らく薬中の話だと、俺はオフ会の役制限麻雀大会（嶺上開花以外の役は不成立）の際、麻雀の自動卓に思い切り頭をぶつけて脳震盪を起こし、更に自動卓がその衝撃でどういいうわけか爆発。俺はその爆風をもろに食らい

自動車の破片や牌が全身に突き刺さって死んだとのこと。薬中曰く「偶然お前の両目にイーピンがゴツ刺さったときはワロタ」らしく、思わず殺人嶺上開花を放ちそうになったがそこは何とか自重。

…やっぱり薬中は薬中だな、関わりゃんこ。

と思っっていたら何だか慌てて「次に転生できるならどこに行きたい？」とこれまた良い感じに左脳と右脳がストライキを起こしたような痴呆染みた質問を投げかけられたので、「んなら俺を咲にしてくれよ、小林先生の」と吐き捨てながら言ったら、これまたどういう世界の因果律か、本当に宮永咲になつてしまったのである。大体、まだ物心があるかないか分からないくらいの幼い咲に。

昔から「女兒かJKかJKのブラジャーになつてみたいなあ」という密かな願望があつた俺は良くネットで見ると言うようなTS小説で描写される苦悩など一切なく即座に順応、少し疑われたりはしたがそれでも日々を慎まやかに過すごしている。一人称だつてすぐに「俺」から「私」になつた……ただまだ気分的には昔やつたネカマを現実でロールプレイしている感じだが。だからかまだ心の中での一人称は変えられていない。

そう言えば咲がトラウマを背負うきっかけとなつた家族麻雀で思い切り勝つて、叱られても論理的に反論したりして姉の宮永テルテル（勝手につけたあだ名）に怖がられたりもしてるが、まあそれも特に問題は無い些事である。それと他の家族全員に少し引かれてる気もしたが、多分それは気のせいだろう。大人しく、子供らしくエルフェンリートを見ている俺に隙など無い！

……だがしかし、こうしてすーぱーな魔王少女、宮永咲となつた俺だがただ一つ、決定的な問題を抱えていた。

……咲なのに、嶺上開花ができないのである。咲なのに。

咲として転生(憑依?)してから随分と時が経ち、中学二年生となった。

原作ではこの時点で既にテルテルは長野の地からお引越して大都会東京の白糸台高校に入学しているはずだったが、なぜか清澄高校に入学していた。何故だろうか？後両親も別居するはずだったが未だどちらも長野で平和に暮らしている。本当に何故だろうか？

まあ、「私」は原作遵守とか興味はないのでそれについては思考停止し、現在は前世からの嶺上修行をひたすらに続けている。なにせこの咲の器には嶺上開花をする能力が無いのだ。その理由は未知数ではあるが、しかしきつと嶺上開花の能力発現の芽は残っているのだろう。もし全人類が嶺上開花の出来ない咲に転生したらその99.9%が嶺上開花するための修行を喜々として取り組むに違いないからして、私のこの行動は完璧なものであると言えるだろう。

そして時期は6月の、梅雨も本番に入る頃となり。

前世の中学時代ではある程度勉強はできたため、間近に迫った定期試験は多少の復習のみで大丈夫だと思いきや今日とて教室の自分の席で嶺上街道を爆進していると、髪色ではつちやけちやつてる金髪爽やか幼馴染が何だか勢いよくこちらへと向かってきた。

…何かもう、時期的にこの時点で用件は分かっってしまうが、「一応」どうしたの京ちゃん」と尋ねてみる。

「咲！頼む、勉強を教えてください！」

「ええつまたかあ」

「最近大会近いから部活の練習が忙しくてさ」

そうそうこの男、須賀京太郎は定期試験の度に地元の小学時代からの幼馴染という横の繋がりを利用してこちらに教えを請いに来るのである。原作では何であんな影が薄かったんだと思わずにはいられないはずうさじさだ。

そして私も社会的な体裁として、一般的な女子中学生としてのイ

メージを保全するためにそれを断らず、意気揚々とそれを受け入れている。実際中学生レベルの問題なら雀カス落ちこぼれ高校生と前世で兄に呼ばれていた私でも片手間で教えることが出来るからノーモンタイといったところか。

「まあいいけど、試験もう明後日だよ?」

「分かってるって、これから基本的な暗記事項を授業中に詰め込むんだよ」

「でも数学と社会は今日の授業内容も試験に入るって先生が」

「まじかよ…咲、それも併せて頼んだ!」

「面倒くさいなあ…んで今回の報酬は?」

因みに何だか毎回無償で引き受けるのも癪なので、こうして対価を要求している。

「そうだな…じゃあこの間二つ先の駅にできたケーキ屋の絶品苺ショートケーキ10個!もってけ泥棒!」

「いいや要らない。それよりも新しい麻雀教導本買ってきて、すこやんの」

「…いやお前な?もう女子中学生なんだから、何というか、もう少しそれっぽいものをな…」

「すこやんの本で」

何といつても無駄だぞ京太郎、なにせ私は嶺上道を歩む者。その上この先永遠の私の推しキャラである和と同じ釜の飯を現実で食える事が分かっているんだ。そんな夢みたいな光景を目の前に行っているのに、人生を総舐めするか如く甘々な劇物を食べている余裕なんてあるはずないじゃないか。

「…まあ分かった、分かったよ。じゃあ放課後、宜しく頼むからな」

「りよーかい、そっちこそ頼むからね」

さあ、私の嶺上街道はこれからだ!

閑話 須賀京太郎の老婆心？

俺には宮永咲という、少々風変わりな幼馴染がいる。

咲と出会ったのは小学生の時だった。確か、当時は2年生か3年生くらいだったはずだ。

その頃の咲は何だか毎日麻雀牌を握りしめて「…これは…七索かな」とかやっていた。今から思えば多分盲牌の練習だったのかもしれない…、だがまあ当然周りの同級生はその不気味な様子を怖がったり気持ち悪がったりしていたし、俺もあんま関わりたくはないなどは幼いながらに思ってたな。

まあだから、とどのつまり咲が虐めのターゲットになるのは割と自然な流れだったんだろうなあ。

最初は物を隠すだとか、ノートにいたずら書きするだとか、小学生らしい陰湿な虐めからスタートしたんだ。

俺も放課後に偶然その光景を見つけて、その時は勇気が無かったから注意できなかつたけど翌日に咲にそれをやった面子を教えただ。

それで返ってきた答えが「もう知ってるよ」の一言、曰く小型カメラや盗聴器を自分の机の近くにしかけていたらしく、証拠が出揃ったら先生に報告すると無感情に言っていた。そう、宮永咲は昔から無茶苦茶な奴だったさ。

それからすぐに席替えが行われて、その咲を虐めてた面子と咲の席が遠く離れた。多分水面下で解決したんだろうなあ、とか思っていたら今度は俺の隣になったんだ。それをきっかけになんか適当に話してて気付くと、こんな長い付き合いになっちまった。

…！
だから俺は小学生から全く変わらないあいつのことが心配なんだ

別に幼稚ってわけじゃない、むしろあいつは小学生の頃から良く言

えば論理的、悪く言えば少し理屈っぽい人間だったさ。

けどな…けどな！

いくら何でも中学生になっても麻雀一筋すぎるだろ！教室では相変わらず麻雀に関することばかりで友達は居ないようだし、最低限私服には気を使ってるっぽいけどもそれ以外は全くの無頓着…、幼馴染としてはあまり放置できない問題だぞこれは…！特に新学期の自己紹介で「趣味は嶺上開花、特技は嶺上修行です」って何だよマジで！それに何であそこまで嶺上開花に魅入られているのかも謎すぎる、偶にテレビで見た新興宗教の教祖と似たような狂信的な瞳をしている時とか本気でビビるから勘弁してくれよ本当に！

「…そうだな、次はショートケーキじゃなくてぬいぐるみみたいなアクセサリー路線で行ってみるか」

こうして俺の、咲を真人間女子中学生に戻す戦いは続く。

あ、後取り敢えず全世界から嶺上開花は廃絶してください、本当に。

カンせずにはいられないな…!!

七月。

定期試験が終わったので、更なる嶺上成長を遂げる為に私は数駅先にある麻雀教室へと通うことにした。

もともと麻雀教室には興味があったのだが、如何せんお金が無かったからバイトしてお金を貯めたのだ。両親にもそのことを話したのだが、「咲も偶には麻雀以外に興味持ったらどう？」という内容を遠回しに30分間話され、テルテルは怯えながら自分のお小遣いを渡そうとしてきたので思わず拒否した。

：何でだろうか、世間は麻雀ブームなのに私の周りはどうにもその真反対な気がする。

夏の長野のじんわりとした暑さに耐え忍びながら、地図を頼りにその教室の場所まで行くと、どうやら普通の一軒家を少し改装しただけの外装からして個人での経営らしい。いや、チェーンの麻雀教室があるかは知らないけど。

ともかく、麻雀教室の扉を恐る恐る開けてみるとそこには麻雀の自動卓が6つほど所狭しと均等に並べられており、その周囲では私と同じか少し幼いくらいの子どもが数人ほど麻雀で遊んでいた。

ただの麻雀教室にしては自動卓が多いなあ…。

思った以上に整った設備に少し感心していると、この教室の教師と思われるまだ若い、20歳前半くらいの優しい気な男がこちらへと歩いてきて、

「初めて見る子だね。…もしかして君が宮永咲ちゃんかな？」

因みに、既にお金に余裕が出来た時点でアポイントメントは公衆電話から取っている。リンシャンリストに抜かりはないのだ。

「はい、今日からお願い致します」

「うんそうか。今日から頑張ろうね」

そう言ってガッツポーズをすると、この麻雀教室でやる内容やその

他の注意に関する説明を簡潔にされる。そのあたりは完全に事前に知らされていたことや常識的な事柄だったので、特に障害はなく流す程度に聞き流す。

「……それで咲ちゃんは確か…、ジュニアプロコース志望だったよね?」

嶺上道を歩みし者として、また超絶美少女雀士の和と肩を並べる人間として、当然の選択である。

「はい。間違いないです」

「じゃあ申し訳ないんだけど、プロコースに入る為にはテストがあるんだ」

「そうなんですか。じゃあお願いします」

「おつ。やる気だねー…じゃあ早速やろう、って行きたい所なんだけど…」

おつ?何だ?もしかして女子中学生はプロコースに入会出来ないとも言つつもりなのか?されば私の嶺上開花が火を噴くぞ?

私の不穏な空気を感じ取ったのか、その男は申し訳なさそうに間延びした声で

「いやあ、まだあと二人先生が来てないんだよ。実を言えば僕ともう一人はバイトで、鷹野さんって強面のおじさんがこのオーナーなんだ。…ここだけの話、鷹野さんは街中で良くヤの付く黒服の怖い人と良く間違えられててね?咲ちゃんも初対面ではビビるかも知れないけど、本当は普通のおじさんだから挨拶してあげてね」

「ん?誰がヤクザと見間違えられる強面だつて?」

「た、鷹野さん!」

先生の背後からぬるりと現れたのは、確かにその先生の言っていたように子供には中々に恐ろし気な風貌にも見えるだろう、中年のおじさんだった。

それを見た先生はあわあわとしながら、

「鷹野さん、ちよ、チョリースー!今日のウエザーもすこぶるハッピーハッピーですね!」

…何でそんな、若者かぶれしちやっただおじいさんみたいな言葉遣い

になつてゐるんですか先生…。

「君のその、慌てた時のそれ、どうにかならんのかね…」

「い、…いや…あの…すいません」

溜息をつく鷹野さんに、正氣に戻つた先生が落ち込みながら謝つた。

「…まあ良いさ、君がそう言う人間だと分かつた上で私は雇つて居るのだからね。治れば一番ではあるが…」

「鷹野さん…」

「あの、ホモっぽい空気を醸し出している所申し訳ないんですが、テストを早く受けさせて頂けませんか？」

「…どうやら君も大概な生徒のようだね。そこまで言うのなら今すぐやろうじゃないか、うん」

「鷹野さん、まだ天海さんが来てません」

麻雀教室と言われて来たものの、何だか幸先から不安になつてきたなあ。

そのまま数分、同年代の子たちが麻雀を打っているのを遠目に見ながらちよこんと待っていると、「カランコロン」という軽快なベルの音と共に、こちらは女子高生…にしては少し幼いような気もするけど恐らく女子高生で、ついでに多分これが天海さんと言う最後の先生なのだろう。

天海先生は能面な表情でドアをくぐるとこちらへと歩いてくる。

「天海さん、おはようございます」

「…」

先生の挨拶に無言で返す天海先生。

「…あれえおかしいな、いつもなら掠れるような小声で「うん」って呟くんですけどなあ…」

何この麻雀教室、何でこんな濃いキャラ多いの？

「まあまあ、ともかく天海君。今からジュニアプロコースの試験をやるから君も早く着替えてきなさい」

そんな鷹野さんの言葉を受け取つたのか受け取つてないのか、天海

先生はやはり無言で店の奥へと行ってしまう。これもう、寡黙ではなくコミュニケーション不全ってレベルですらある気がする。

…こういう人って裏ではメンヘラだったりするんだよね。もしかしたらリスカ痕とかあるかも知れないし、あんまり近寄らないでおう。

そんな若干失礼なことを考えていると、店の制服に着替えた天海さんは五分もしない内に裏から出てきて、

「あ、初めての子ですね！私は天海春乃っていうの、気軽に「はるるん」って呼んでね！」

「…あの先生、誰ですかこれ」

「…何かさっきの無表情な女子高生とは似ても似つかないんだけど。」

先生は微妙な、苦笑いをしているのかしていないのか判断の付かない表情で、

「…天海さんはね、普段は大人しいんだけど仕事の時だけは何故か人が変わったようにテンションが上がるんだ」

「飯塚先生…そんな誤解話招くような表現しないでくださいよお！」

きやつきやと、まるでアイドルのように話しかける天海先生。…だから何でこの麻雀教室の教師陣はこんなに濃いのか。

「まあ揃ったことだし、まずは試験の内容を説明しよう」

鷹野さんは二人を無視してそう告げると、一枚の要項がプリントされた紙を見ながら読み上げる。

「ジュニアプロコースは…そうだね、私たち三人と半荘戦を三回打ってもらって、一度でも二位以上になれば認定だよ」

「そんな簡単でいいんですか？」

「いやそれが達成できる生徒さんが少なくてね…」

後ろでなんかしらを言い合っている二人を一瞥すると、

「…私はいくらでもシニアリーグを引退した身でね、後ろの二人もバイトではあるがプロ志望なんだよ」

「今日はありがとうございました」

そう言うと、今日からジュニアプロコースになることに決まった咲ちゃんは店を出て行った。

それにしても多少毒舌があるとは言っても、フリルの付いたワンピースを着たあんな可愛い女の子がまさかあそこまで強いとはね…。

「鷹野さん、どう思います?」

「ありやあ完全に原石だよ、それも磨きかけのだ」

「鷹野さんもそう思いますか」

一応プロを目指して麻雀をやっている僕からしてもかなり難敵だったけど、現役を引退したとはいえ元一線級のプロの鷹野さんまでそう評価するとは…。

鷹野さんは神妙そうに、

「そりやそうだよ。東一局に私が親リーをかけて同じ巡目で咲くんがカンをした時は駄目かと肩を落としたんだけどね…、まさかカンドラが全部乗った上でタンヤオを和了するとは思わなかったよ。——それに何だかそれを残念そうな表情で眺めていたんだ」

「ええっ!?!それ本当ですか!」

カンドラが全部モロ乗りするとかそうそうないし、そのおかげでタンヤオが満貫手になったって言うのに…!?!普通は喜ぶ場面なはずでしょ…!?!

「しかも以降彼女はカンをするたびにカンドラがモロ乗りしてる、完全に能力持ちだよ。咲くんは」

「…やっぱりあれ、そうですよねえ」

確か三半荘やってその内十回以上のカン全てでカンドラが乗っていたしね。ああいう能力を持った雀士はプロ、特に女子プロに多いけ

どもこうしたところで見かけると驚きも一入だ。

そう思っていると鷹野さんは紙を一枚取り出す。

「…もしかして牌符取ってたんですか?」

「まあね、咲くんが異常だと思つて二局目以降からは取るよう言ったのさ。そしたら面白い事が分かったよ」

「えつと…全く想像できないです」

「まあだろうね。彼女にカン材が沢山流れ込んできている事くらいは気付いていただろうけど、まさかその全てのシチュエーションでカンをしているとは思わなかつただろう?」

「全てのシチュエーション…つてことはもしかして聴牌崩してもカンしていたのですか!？」

「それだけじゃあない。向聴数が繰り上がる場面でも、カンによつて点数が安くなる時でも、咲くんは必ずカンを選択していた」

それを聞いて思わず驚嘆する。

なんだそれ…、完全に向こう見ずなカンじゃないか。幾らカンドラが全部乗るかも知れないとは言え、和了できなかつたら意味が無い。闇雲なカンは身を滅ぼすことを知らないのかもしれない…。

鷹野さんは冷静に言葉を続ける。

「…ただカンばかりするだけなら、ただの初心者かも知れない。しかし咲くんは牌符を読むとちゃんと牌効率を分かっている節もあるんだ。その証拠に生牌と切れた牌を常に意識して打ってる、カンをした後の打ち回しも動揺してぶれていることもない。それに何局かに一度程度だが、私たちの和了牌を読んで浮牌になるのも厭わず手牌に止めている。何より、一回とは言えトップを取っているのも事実だろう?」

そう、咲ちゃんは二度三位を取った後に三戦目で一位を取っているのだ。これは紛れもない真実で、それほどに咲ちゃんの実力が熟しているのだとも言えると思う。

「まあ、そうですね…しかし何で咲ちゃんはあれほどにカンに拘るんでしょうか?」

「…さてねえ…、それほどの重い何かを、咲くんはカンに抱えているの

かもしれないねえ」

閑話 須賀京太郎の休日

咲の助力もあつて無事に迎えた7月。

部活のハンドボールの大会も無事終わり（三回戦で負けちゃったが）、ようやくゆつくりと家で休めると思っていたのだが――
「何で俺、またここにいろんだらう……」

――今俺は宮永家、つまり幼馴染で変人の咲の家、のリビングにいた。しかし別に咲に会いに来た、と言うわけではなく。

「京太郎君いらつしゃい、外暑かっただらう？ ジュースでもどうだい？」

「えつと、…はい。じゃあ頂ます」

咲のお父さんからオレンジジュースを受け取り、恐る恐る飲む。

「じゃあ京君、咲の中学校の様子とか、普段の様子を教えてください。」
告げたのは咲のお母さんだ、もう40代後半のはずなのに凄く若く見える、つてそうじゃなくて。

そう、今日俺が何のために呼ばれたかと言えば咲の様子を報告するためだ。麻雀と嶺上開花に憑りつかれて友達のいない咲の、唯一の友人である俺は何故かこうして偶に宮永家に呼ばれるのである。

…これ完全に貧乏くじだよな？ 幼馴染の両親と1対2とか普通ないだらう…。

妙な緊張感の漂う一室の中、俺は口を開いた。

「えつと…そうですね…、中学2年のクラス替えの自己紹介あるじゃないですか」

「ああ、そういうのもあったねえ…必ずクラスに一人は笑いを取りにボケてくる人がいるんだよねえ」

「そこで咲はまず「私は宮永咲、特技は嶺上開花、趣味は嶺上修行です」と言いました。真顔で」

ガタツと椅子と床が擦れる音が聞こえてきたけど、気にせず続ける。

「そこで困った先生が「他には何かありませんか？あの、部活とか、好きな食べ物とか」って聞きました。すると咲はこう答えました、「部活は嶺上部、好きな食べ物は嶺上にぎり」と」

「咲……！」

思わず咲のお父さんが頭を抱える、無理もないだろう。自分の娘があんな変人になったら誰でもああなる。

「…そう言えばこの前咲が珍しく台所でおにぎり作ってたけど、そういうことだったのね…。と言うか具が全部ほうれん草で思わず目を背けたけど、あれ食べてたのね…」

中身全てほうれん草のおにぎりを「嶺上にぎり」と名付けていたのか…俺、ますます咲の事が良く分からなくなってきたんだが…。

「きよ、京太郎君…今回は他に何かあるかい」

「あります。滅茶苦茶」

「だよねえ…」

因みに今回でこの報告会は10回目を迎えているが、咲はその間何も変わっていないのでその奇行も減らず、毎回報告する内容にいとまがなかったりする。

「後凄い印象に残ってるのは国語の個人発表ですね…」

「それはどんなことをやるのかしら」

「授業で文章の書き方を習ったのでじゃあ何か文を書いてみましょうってことになって、後で発表したんですけど…。…咲の書いた文章、と言うか論文は「嶺上牌に対する研究と考察、そしてその応用」ってタイトルの全100ページにも及ぶ大作でした」

「ああ…！」

あ、遂に咲のお母さんまで崩れ落ちた。まあ仕方がないけど。

「因みにその論文、国語教師が麻雀好きだったようで何か全国ジュニア麻雀理論連盟？みたいなところに推薦したらしくて、すると見事に優秀賞獲得。今じゃ学校の職員室の前にケースに入って飾られてます」

「……………さ、…咲…」

そこまで話すと、咲の両親は何だかノックダウンされたボクサーのような沈んだ面持ちでただただ茫然としている。因みにこの光景ももう10回目なのだが、全く慣れる気がしない。

「あ、京太郎…？」

「あ、照さん。こんにちわ」

「それより、暇ならゲームでもしない？」

「いいですよ、今日こそ勝ち越しますからね…！」

「望むところ…！」

こうして、照さんと夕方までテレビゲームをすることでところまでが俺の宮永家に来た時の決まった流れである。

普通のリンシャンさせてーな

中学三年生になった、七月。

今日も今日とて嶺上修行とブイブイ言わせていきたいところではあるが、残念なことに、誠に遺憾ながら遂に高校受験が差し迫ってきている。

なので七月を過ぎたら麻雀は暫く改装閉店、嶺上ゲージ蓄積期間に突入するわけである。ーーまあ嶺上修行は続けるのだが。大いなる嶺上の根源への到達を目指すリンシャンリストからすれば嶺上開花と麻雀は全く別物なのである。

まあそんな訳で、受験のために今日は今まで務めていたバイト先の最後のシフトということだ。

現在のバイト先は「R o o p t o p」という雀荘で、家から何駅か離れた場所にあるものの非常に好待遇（中学生にしては、だが）で雇ってくれている。元々は麻雀教室に通うために中一の冬からここで働いていたのだが、資金が貯まりきった後も惰性と、後居心地の良さからそのままダラダラと働き続けて気づけば中学三年生。いやはや時が過ぎるのは早いものである。

しかしこの雀荘、不思議な事に私が働いたこの約二年の間で満員御礼となったことは数えるほどしかない。そのおかげで業務は色々と楽で仕事でも嶺上道に励むことが出来たけれども、今後の経営が危ぶまれるところではあるかもしれない。ほんと、客に軽い飲食提供と麻雀の代打ちをするだけの簡単な金蔓アルバイトーーもとい仕事だったので、本当に残念である。

「こんにちわー」

私はそう挨拶しながら既に見慣れた店内の中へ入ると本日もやはり閑小鳥がムンクもかくやと言った大絶叫を繰り返しているようで、客は自動卓で麻雀を打っている青年集団4人組しかいない。因みにこの4人組も常連で、休日も平日も朝から夕方まで居座っている、

言ってしまうえばニートなのだろう。事実、私が中学二年になった辺りからシフトの入っている日には大体見かける。：最早私よりもこいつらの方がこの雀荘の顔なのではないだろうか。

その他にもそんなニート集団を多少気にしながら、飲食スペースにあるカウンター席の奥のキッチンで洗い物をするワカメみたいな髪の毛をした女の姿があった。

——この雀荘を経営する親の一人娘であり、私の先輩にもあたる染谷まこである。そう、原作では私や和がメインに闘牌描写されているのに対してキンクリ要員扱いされている、染谷先輩である。

染谷先輩は洗い物をしながらもこちらに気付くと、

「お、今来たんか。早いじゃけん」

「はい、まあ最後のシフトなので」

「そうか：もうそんな時期か」

染谷先輩はそう呟くと、少し寂し気に眼鏡を掛け直す。確かにこの雀荘で染谷先輩と同年代のバイトと言うと、一つ下である私くらいしかない。まあ普通に考えて幾ら世間が麻雀ブームと言っても来る人間の多くが半ば歳の行ったおっさんであるこんなローカルで個人経営の雀荘店じゃ、女子高生のバイトも中々集まらないだろう。現実に私と染谷先輩とその両親を除けば、この雀荘で働いているのは男子大学生か専門学校生かフリーターかのどれかである。

：何だかこれだけだと女つ気のない上麻雀漫画でよくある荒々とした無法地帯の雀荘に思えるかもしれないが、しかし店内は非常にアットホームで流れる空気は穏やかである。女性のお客さんも来るし——まあ極稀にだけ。月に一度くらい。

「咲、アンタが来てから結構色々あったなあ」

「そんな何かありましたっけ？私、普通に働いてただけですけど」

：ぼんやり思い出してみるけど何も浮かばない、うん。特に何かあったとかはなかった気がする。いや嶺上開花のバースト力は高められたとは思うけども：まあそれは違うだろう。

染谷先輩は懐かしむように、

「あれは一年前の春頃じゃったか：？ガラが悪い客が来たの覚えてい

るか」

「いえぜんぜん」

「…まじ?」

「はい」

ガラの悪い客なんていただろうか…?

ついでに何か、ニート四武衆の肩がビクリと大きく跳ねるように動いた気がしたがするが…こっちは気のせいだろう。

「まあ覚えてないなら仕方ない。…あれは殊に寒い日じゃったー」

「あ、もしかして去年の4月15日の事だったりします?」

「ーーわしより俄然詳細に覚えてるじゃんけ!!」

ハツと脳裏に思い浮かんだんだから仕方ないじゃん。だから唾飛ばしながら叫ぶな藻類先輩。

ともかく、確かあの日は平日で、学校帰りにこの雀荘にバイトしに来たはずだ。

それで普段と同じように嶺上修行しながら仕事に打ち込んでいると、何かこれまた気持ち悪い程に髪の色がひん曲がっている派手な格好の男たちが入店してきた。それだけなら文句はないのだが、他の客にまで迷惑をかけていたので思わず嶺上拳で黙らせた上で説教、更生させたのだ。強制的に。

「あの人たち、今は何しているんですかね?」

「さ、さあ?どうしているんじゃないだろうな?」

何だか目を泳がせながらあからかさまに動揺する染谷先輩。…もしかして何か知っているんじゃないだろうか?

「染谷先輩…?」

「い、いやーわしは知らんぞ!…まさか咲の説教が原因で本当に更生した上にファンクラブまで作って、どこから知ったのか咲のシフトに合わせて来店しているとは言えんしなあ…」

何だか小声でぶつぶつ呟いているが声が小さすぎて聞き取れない。そこまで教えたくない自分に不都合な事なのか…清澄高校に入学した後、覚えているよ…?

「そ、そういや去年の夏から秋までシフトあんまり来なかったが、何をしていたんじや?」

「露骨に話題をそらしましたね?」

「何をしていたんじやあの期間は…!」

…まあいい、乗ってあげようじやないか。だが本当に来年、覚えてろよ…?

憤りを抑えながら、私は一年前当時を振り返る。

「…あの時は麻雀教室に通ってましたね。嶺上道を極めるために」

「嶺上道ってなんじや…にしても、なら随分短期間じゃったな」

「まあ破門されましたから」

「破門!」

染谷先輩は信じられないと言った形相をしているけど、全く同感である。

「本当にあり得ませんよね。私はただ同じジュニアプロコースの同志に「カンこそ正義! 嶺上開花こそが麻雀における神秘の源なのだ!」という嶺上開花の教えを広めただけなのに」

「ああつ成程」

何だそのすんなり納得が行った、みたいな表情は。ゴツ殴るぞこら。

「教室通ってた時は結構順調だったんですよこれでも…」

「麻雀の実力向上が?」

「いえ、リンシャンリストの育成が」

「駄目だこりや…」

そう、嶺上道の布教をしている最中のある時店長の鷹野さんがスタスタとやって来て「咲くん、君、他の生徒さんに良からぬことを教えているね…?」と言われたので明々白々と正直に答えたら破門されたのである。今でも本当に納得いかない、鷹野さんの脳内にはウジ虫が湧いているのではないだろうか…?この邪教者め。

「まあそう言う訳で基本的には恨んでるわけですが、感謝しているところもあるんですよ?」

「ほお」

「教室のおかげで私、カンをしたらカンドラが全部乗るってオカルトがある事が分かりました」

「それ、わしも一年前から知ってたが」

「あと、これまで嶺上開花がまだ一度も和了出来てないだろうことも牌符を書き始めてから分かりました」

「それも何となく知ってた」

……。

……………。

……………。

「……何で教えてくれなかったんですか!？」

それ教えてくれていたなら私、高いお金払ってまで教室行く必要なかったじゃんか！

「自分でもう気付いていると思ったんじゃないかって！てかそもそも麻雀たくさん打ってたら普通気付くじやろうに!」

「言ってくれば即座に気付きましたよ!?!でも言われなきや気付かないじゃないですか!?!例えば染谷先輩、お客さんと打つてるときにお客さんの顔を見ずに麻雀卓を親の仇のように凝視してることに気付いてるんですか!?!」

「……えっそれ本当なんか!?!まじなんか!?!」

「卓の光景を覚えようとしているのか何なのか分かりませんがお客様さん怖がってるんですよ、いい加減にしてください。まあ私も言っていないか分からなかったのと言わなかったんですけど」

「いやいやそれは下手をすれば店の経営にも差し障るから注意して欲しいんじゃない?」

いやいや、先輩を注意するとかかなりの勇気がいるじゃん。中世では臣が王に諫言する時は命がけだとも聞いたことあるし、そんな勇気私にはありません。

「まあとにかく分かりましたよね、言ってくれないと分からないことも世の中には数多にあるんです」

「…不承不承じゃが、一応は」

「だからこれからは何かあれば言ってもらいたいです」

「今日が最後のシフトだろうに…」

そういえばそうだった。

「ともかく、最後のシフトも気を緩めずしっかりやってくれ」

「客、いつもの四人しかいませんけどね…」

「…言うな」

閑話 須賀京太郎の新たな趣味

気付くともう中学三年生になっちまって、しかも部活の夏の大会も終わって引退。時が経つのは早いなあ…去年の今頃、部活と勉強で四苦八苦してたのが昨日のことのように思い出せるのに。

ただそれまで当然のように存在していた部活の練習という束縛からの解放感からか、何となく勉強には身が入らない。

いや、もう俺も受験だしやらなきゃまずいのは分かってる。分かってるんだが…、外は暑いし体は何か怠いし、まあ仕方ない。自分で言うのはアレだが、仕方ない。

そこで照さんからテレビゲームの誘いが来たりするんだけど（と言うか彼女は俺が受験生という事を分かっているんだろうか）、流石に親の目もある上に俺自身の良心も痛むのでお断りしている。…別に断ったからと言って勉強するわけでもないのにな、人間の心つてのは摩訶不思議だ。

そこで最近手持ち無沙汰になったから、ネットで麻雀を始めしてみた。咲が狂信的に入れ込んでいる、例のあれに。

身近に麻雀狂人がいるからか、「麻雀って滅茶苦茶ヤバイゲームな

「んだらうな」と偏見を持ちつつ始めてみたのだが、——しかしこれが面白いのなんの。

最初はルールや役を覚えるのに苦労したのだが、一旦覚えると点数計算やその他の処理は勝手にやってくれるからか凄い楽で楽しい。ここ最近のマイブームになっていたりする。

だがしかし麻雀を打てば打つほどに咲への謎は深まるばかりだ。

何せ奴が興味がある——というか信仰しているのは麻雀というより嶺上開花という役そのものである。ネットで調べてみれば和了率は一般に0.28%だと：普通に和了無理じゃないか？かく言う俺も一度だけ和了したことはあるが完全に偶然で、もう一度やれと言われても出来ない自信しかない。咲は何やらその嶺上開花を自由自在に出来るようになりたいらしいが、頭で考えて一瞬で無理って分かるだろ。「もう一人の私が出来たんだから私だって出来るに違いない」とか前言った時は危ない薬でもやってるんじゃないかと思っただが、今じゃ一周回って咲はナチュラル狂気に吞まれていると思うようにしている。：幼馴染が真人間になる日って来るのかこれ：？

：頭が痛くなってきた。この件は考えるのを止めよう。

そういやまだ初心者だけど国士無双や四暗刻みたいな役満や槍槓も和了出来たんだがこれらもどうやら珍しいことらしい、特に槍槓が出る確率は0.05%程らしく自分でも二度も偶然和了で来たのは驚くばかりで。

：もしかして咲の毎度言ってるような嶺上開花よりも凄いんじゃないか、これ。言ったら切られそうだから言わないけど。

「お、咲からメールの返信来た」

思わずそんな独り言を呟いてしまう。因みに送ったのは最近麻雀にハマった、という日常的な内容のメールである。

「えつと：リンシャンリストの集いに入りませんか？貴方には隠れた才能があります、それを開花させるためには私たちの作った特別な修行を積む必要があります。私たちと一緒に嶺上の頂を覗きに行きませんか？老若男女問わずメンバー募集中、今なら嶺上まんじゅうを1箱プレゼント。——これ、私の作ったグループの紹介文のコピペな

んだけど、京ちゃんもどう？メンバーには京ちゃんの大大好きなお餅の大きい女の子もー」

俺は最後まで読まずにメールを削除した。